



共に創る一步

益城町に移住して、教育や共創まちづくりに携わる活動をしてきた地域おこし協力隊。
令和7年3月で任期を終える4人の活動を振り返ると町を大切に思う気持ちと笑顔があふれていました。

いのした ゆり か
井下友梨花さん
大分県佐伯市出身
元 認定NPO法人カタリバ職員

こながたかひろ
小仲貴宏さん
大分県大分市出身
元 伊佐市高校魅力化コーディネーター

なかむらこうすけ
中村康佑さん
熊本県熊本市出身
元 熊本県庁職員

よしかいゆう た
吉海雄大さん
熊本県芦北町出身
元 熊本大学研究員

住んでもらう移住政策だと思
うんです。そこで自分がどう
生計を立てるかを考え、起業
する協力隊が多いと思うん
です。けれども益城町が求めた
のは、町民の皆さんとの協働
を目指す「共創」のまちづくり
これまで勉強してきたまちづ
くりの考え方は、結構マツ
チしてるけど、協力隊という
立場としては自分の名前も売
らなきゃ：みたいな葛藤はあ
りましたね。

中村 最初、どうしたらいい
んだらうというのは僕もあ
りました。でもまちづくりや
地域づくりを学んできた中で、
地域の人の意見を聞く、一緒
に何か作り上げるというのは
ベースにあったので、割とす
んなり受け入れられました。

井下 私も「共創」は大事にし
ています。1人の100歩よ
り100人の1歩。自分がど
んどん歩みを進めるより、い
ろんな人が1歩踏み出すこと
に関わっていく方が、長い目
で見た時に自分も楽しい暮ら
しができると思っています。

小仲 僕は仕事として意識的
に共創している部分もあるん
ですが、井下さんは共創した
くてやってるように見えます。

NPO職員から協力隊に
吉海 協力隊としての私たち
の活動テーマは、教育と共創
まちづくりでしたよね。まず、
教育に携わる活動をしてきた
井下さんは、町からどんな要
望があり、それに対してどん
な活動や地域との関わりがあ
りましたか？

井下 私が初めて益城町に來
たのは、地震の年の5月。教
育NPOの職員として、中学
校で生徒たちの学習の場を担
保するために、学校内や仮設
団地での学習会を開催しまし
た。学校行事や授業の支援を
する中で、地域と学校をつな
ぐ立ち回りもしていました。

吉海 発災から数年は子ども
たちの学びの場を地域の人た
ちと作り、充実させるという
期間だったんですね。

井下 3年後、コミュニティ
スクールの推進する協力隊
の募集があり、それまで災害
支援でやってきたことと共通
する部分もあったので応募し、
協力隊になりました。委嘱状
には教育コーディネーターと

自分が生き抜くための「競争」ではなく

真の意味で一緒にやっている
というように感じます。

住民と行政の間の立場で
吉海 中村さんは行政職を辞
めて協力隊になりましたよね。
中村 僕が協力隊になった目
的の1つに、行政の仕事をよ
り良くしたいというのがあっ
て。地域外から来た移住者で
あり、行政の職員でもある協
力隊は、地域と行政の間のよ
うな立場で地域を客観視でき
るのがいいところだと思いま
す。行政とも地域とも話がし
やすいので、行政側にもそこ
をもっと知ってもらえればい
いかなと思いますね。

吉海 僕も地域を良くするた
めには、地域の人だけでなく、
行政の人を応援できる状況に
なればいいなと思っています。

井下 私も、誰の1歩でも応
援したいと思っているので、
行政の人が何かやりたいとい
う思いがあれば、ぜひ関わり
たいです。益城町で活動して
いて、行政の人や住民もみん
ない人なのになんとなく距離
があるのかな、お互い良いこ

書いてありました。
吉海 災害支援から始まった
学習会は、井下さんが協力隊
になった後も続いたそうです
ね。教育NPOの職員から協
力隊になって、活動はどのよ
うに変化しましたか？

井下 学習会を地元で継続的
に運営していく方法を探っ
ていた時、熊本大学教育学部
が手を挙げてくれて、私が協
力隊になる時に引き渡しまし
た。その後、学習会に参加し
ていた中学生が大学生になり、
自分たちで学習の場を提供し
ています。本当にすごいなと
思います。私は益城町で暮ら
す協力隊になって、災害支援
としてとにかく目の前の人の
役に立ちたいという考えから
自分の「楽しい」を大切にして
働きたいと思うようになって
いきました。

3人が協力隊に加わって
吉海 井下さんが協力隊に
なって3年後、令和4年から
僕たち3人が協力隊として加
わりましたよね。

井下 3人が来る前の3年間

町民の皆さんとまちをつくる「共創」

とをしようとしているのに意思
疎通がきこえないなと思うこ
とがあって。長い目で見たら、
その距離がもっと近くなっ
たらいいなと思います。

小仲 僕たちが地域と行政を
つなぐことで、少しゆとりが
出てくれば、1歩進むことも
あるかもしれないですね。

中村 行政職の時から、行政
と地域の間にいるコーディ
ネーターは絶対必要だと思っ
ていて、協力隊になったとい
うのもあるので、専門のコン
サルタントではなく、いろん
な状況を踏まえながら、一緒
に考えて整える人と思っても
らえたらと考えています。

吉海 益城町の協力隊として
僕たち4人に共通するのは、
自分が働くことで住んでいる
町が少しでも良くなることに
諦めがなく、「暮らし」と「仕
事」が重なっているというこ
とですね。

は結構孤独というか、この
感覚は正しいのだろうかみた
いな不安がありました。3人
が来てくれたことで、自分の
方向性は間違ってたなかつた
と思えたので、とてもありがた
かったです。

中村 僕たちの役割は「復興
まちづくりセンター」にじいろ
を中心に、町の構想・計画を
理解しながら、町内の人たち
が主となるまちづくり活動を
主催、支援することと募集
要項に書かれていました。抽
象的ですよ（笑）。でも自由
度が高いと考え、町や地域の
状況を見ながら独自に解釈し
できることに取り組みました。

小仲 にじいろという新しく
できた施設を、どのように
運営すれば将来につながるか
考えながらルールを作ったり、
活動を考えたり、時には地域
に出ていたり。活動拠点があ
ることは、ありがたさもある
一方で、責任感や悩みもあ
りました。

**1人の100歩より
100人の1歩**
小仲 地域おこし協力隊って、
一般的には都会から田舎に來
て仕事を作って、その土地に

4人が振り返る
プロジェクトと思い

NEXT